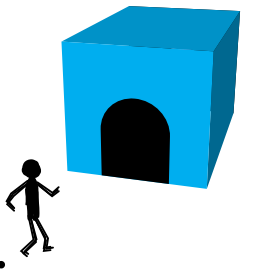


最大級の居心地がある
極小空間
のカタチ

なぜ男は小空間を 目指すのか？



レーシングカーのコックピット、つまり操縦席。F1ではステアリングを外し、脚から身体を滑り込ませるようにして乗り込む。かつて棺桶なんていうあだ名がついていたマシンもあったというくらいに狭い、小さい。

身の回りを「男のための、身の丈の空間論」計器に囲まれ、伸ばした脚の先は視線が届かず感覚だけで踵とつま先でペダルを踏み分ける。ヘルメットに包まれた頭をブラさず視線をだけで周囲の環境を瞬時に読み取る。うーん、男の世界だなあ。

レーシングカーや戦闘機のコックピットに比べると、大型ジェット旅客機のコックピットはどれも空間的にも雰囲気的にもラウンジ化し過ぎ、ダブついているようである。つい先頃新聞ネタになったのは、運行中にスチュワーデスをここに招き入れ、ツーショットで記念写真なんてことをやっていたらしい。ちなみに旅客機のコックピットに出入りする



ーじや思想は、その空間の小ささに反比例して無限の広がりをもっていたのである。

日々の生活の中で身の丈の空間をがちりと確保し、ひとりきりになる機会は限られている。特に男性諸君の場合、ほとんどその特権は奪われている。

わが家の居間をあらためて眺めてみよう。けつして広くはないのだが、読みさしの新聞や雑誌が散らかり、洗濯物はソファに積まれ、テレビは付けっぱなし、食器は山になり……といった具合にダレきっているではないか。それどころか、やっと確保した休みの日の時間には、子どもが走り回り、まわりつかれ、という御仁も少なくないだろう。

そこで朝晩の通勤電車内の時間を、つり革に掴まりながらも、ipodやPSPのイヤホンや耳に押し込み、ポップミュージックのコンサートホールや冒険世界に身を投じよ

るスチュワーデスのことをコックピット・クイーンと呼ぶそうなの。

空間が広がるほど誘惑の機会は増えるようである。

もといっ。男にとって精神の集中力と空間の縮小率は正比例すると言っておこう。

旧くは修道僧や修行僧が籠った洞窟やアルコーブ、利休ら茶人がしつらえた草庵、そ

「男のための、身の丈の空間論」

文＝鈴木明

建築・都市ワークショップ
神戸芸術工科大学教授。
本誌に「身の丈の家」を連載。
著作新刊に「子どもと遊ぶ家づくり
建築教室の教科書」(建築・都市ワー
クショップ/telescoweb.com)がある。

してベンヤミンやマルクスら思想家たちが通い詰めた図書館の最奥のキャレル(個人机)席、あるいは建築家ル・コルビュジエのカップマルタンに建てた休暇小屋など、みな質素で狭く、小さい。しかしながら、そこで構想されたイメ



うとするのである(女性専用車両に間違えて乗り込まぬようにご注意を)。

世の男性諸君。子どもや女性たちに快適空間を占拠されたからといって、あきらめるのはまだ早い。ヴァーチャルな空間に逃げ込まなくてもよいのである。

身の丈の空間はじぶん自身で確保すればよいし、できるのだから。そして身の丈ほどの空間は、掃除も片付けもすべてじぶんコントロールすることが可能なのであるから。

そのしつらえには高級リムジン車の後部座席のようなゴージャス感はいらない。戦闘機のようなコックピットのような緊張感がなくとも、質素で快適であればよいのだ。小振りだが、リラククスできる椅子などあればよい。スタンダードくらいは気に入ったものを仕入れてくれればなおよい。小窓から海など見えれば最高だが、なくてもまあよい。

読書がいつのまにかうたた寝になってしまえば、波の音も聞こえてこよう。



「家の中につくる小空間は、暮らしを楽しむ男が心を置く場所。」

家族との暮らしを大切にしつつ、自分だけのちょっと特別な場所となる小空間を織り込んだ住まいの設計。求めるべきは、ただ便利なだけでも広いだけでもない、心が豊かになる空間。これから家をつくるなら、建築家の提案するこんな工夫がヒントになる。

写真＝幸田青滋 Photo/Seiji Koda

設計＝富田眞二

【とみたしんじ】 富田建築設計室
徳島県徳島市新浜本町2-3-54
☎088-663-8455
http://www.taa2003.com/



子どもの遊び場とお父さんの遊び場。

「藍住町の家」(2005年) 田園風景の中に建つ別棟タイプの二世帯住宅。「付かず離れずの親子関係」をテーマにした設計であるが、若い世帯の室内にも親と子どもの不即不離の関係が現れている。子どもが遊ぶ明るい部屋と対照的に設けられているのが、黒い壁に囲まれるキリッとした空間だ。別室に閉じこもるわけでも、全面開放でもない絶妙な小空間。付かず離れず、お父さんが自分の時間を過ごす機能的なPCルームなのである。

リビングを見晴らす 砦のような二畳空間。

「丈六町の家」(2006年) 仕事と子育てがひと段落した夫婦ふたりが暮らす家。片流れの一枚屋根のもと、家全体を立体的なワンルームとした設計。囲炉裏と薪ストーブがある吹抜けのリビングの一角、階段をトントンと昇っていきつくのは二畳空間の中2階。見晴らしのいい砦のようなこの場所は、普段は囲碁や読書の間であり、何といても究極は昼寝の場所なのだ。だから寝ていて山並みが望める低い位置に窓を切っている。暮らしを楽しむ、遊びの小空間である。

